

英語起源日本語説

神戸松蔭女子学院大学
文学部 英語英米文学科
情報言語コース
卒業論文

指導教員: 清水義範

吉原源三郎

2008年1月

© 2008

吉原源三郎

謝辞

この（従来の常識からみれば）非常識な、起爆性を秘めた論文を出版して下さった風狂書房の大月小波氏に心から感謝の辞を贈りたい。また、本論文の成立に並々ならぬご尽力をいただいた前田岩男氏、泡中夢之助氏には心から謝意を表すものである。

目次

謝辞	iii
第1章 はじめに	1
第2章 先行研究	2
2.1 英語の起源	2
2.2 従来の研究の問題点	3
第3章 語呂あわせとの相違	5
第4章 おわりに	8
文献	9
付録A おまけ	10

第1章 はじめに

ここに発表する機会を得た本論文「英語起源日本語説」は、私の4年間にわたる研究の成果を、ひとまず体系的に構成し展開した最初の試みであり、今後も更に論を深めていきたいと考えてはいるが、とりあえず学界に向けてはなつ私の第一の矢、という性質を有している。

はなたれた矢、という表現が決して大袈裟なものではないことは、これからこの内容に目を通し、読み終えた段階で誰の目にも理解できることであろう。これはまさに過去の常識を根底から覆す衝撃力をもった全く独創的な論文であると言うしかないものなのだから。

しかしながら、はなたれた矢を正しく受け止める的があるかどうかについては、私は残念ながら悲観的な予測を持たざるを得ない。すなわち、この矢が本来正鵠を射ていることに関しては疑いの余地がないにもかかわらず、旧弊で閉鎖的な学界は的を外してひたすら逃げまわるであろうことが想像されるのである。

彼らは門外漢の新説などには耳を貸そうとせず、耳を貸したとしても黙殺するであろう。なぜなら、その説を受け入れることは彼らの依って立つ常識というものの崩壊を認めることにつながるからである。どうして権威の柱の陰で細々と生きる彼らがそんなことをするだろうか。

そういうわけで、ここに私が展開しようとしている学説はその誕生の時から迫害される運命にある。よろしい。その迫害を受け止めようではないか。ガリレオ・ガリレイと同じように、私もまた、それでも真実を述べずにはいられないのだから。¹

¹本論文は15年前に書かれた原稿に手を入れ、現在のところこれ以上直すところがない、という形にまとめあげたものである。具体的に言えば、文章を今日の読者にも理解しやすいように一部易しく書き直し、論証部分には、新たに34の例証を加えた。

第2章 先行研究

2.1 英語の起源

私がここで論証しようとしていることは次の短い一文に要約できる。

(1) 英語の起源は日本語である。

しかし、内容の大きさが文の短さとは比例しないことは、言を俟たない。思えば、従来どの比較言語学者も、日本語が何か他の言語の起源であるというような発想を持ち得なかったのである。

中学一年の時だったと思う。試験の時、次の言葉を英語にせよ、という問題が出て、その中に〈名前〉というのがあった。

私の隣の席の少年は、その〈名前〉を意味する英単語が思い出せなかった。それで彼は、とにかく何か書いておこうという気持から、答えの欄にローマ字で *namae* と書いた。あとで答案用紙を返してもらう時、彼は悪ふざけをするなど先生に叱られるかも知れないと心配したが、その心配は無用だった。彼の答の *namae* は、正解と比べて *a* がひとつ多かっただけで、先生は彼が苦肉の策としてローマ字を書いたということを見抜けなかったのである。

(2) *name* (ネーム) と *namae* (名前)

この時彼の言った言葉、「英語では名前を名めー、というのか」を思い出した時、私の頭に電撃的にひらめくものがあった。

name と *namae* の類似性は、偶然というにはあまりにも近すぎる。*name* の語源は *namae* ではないのか、と想像せざるを得ないではないか。

研究に値する発見であるように、思考の柔軟な私には思えた。これが私の学説の出発点となったのである。

日英語単語間に、ほかに類似性が見られるものはないだろうかという探索の作業が積み重ねられた。その結果、ひとつの新学説を成すに十分と思われる 292 例もが発見されたのである。¹

¹先の脚注で触れたように、その後の研究の進展により、英語の起源が日本語であることを立証する例は 326 になった。

ここにその中から 2, 3 の例を引けば次のようになる。

- (3) a. 汁 (ju) → juice (汁)
 b. 斬る (kiru) → kill (殺す)
 c. だるい (durui) → dull (鈍い)

これだけの例を見ただけでも、日本語と英語との間には否定し難い関連があることが感じられるであろう。ましてや、292 例のすべてに目を通し終えた時、思考の柔軟な読者には、英語と日本語には何か根本的な共通性があることを確信せざるを得ないであろう。²

2.2 従来の研究の問題点

日本語と他の言語の共通性を指摘する研究はもちろん私の研究が最初のものではない。古くは、明治時代に木村鷹太郎氏が、日本人の先祖はエジプト人であり、ギリシャ人でありローマ人であるという大胆な説を主張し日本語とギリシャ語・ラテン語・英語との類似を指摘している (木村, 1981)。木村によると次のような英語の単語は日本語と起源が同じだという。

(4)	夕べ	ダメ	君	籠	なんぼ	潮	骨	ソロリ	身	百合
	eve	damage	king	cage	number	see	bone	slowly	me	lily

一目瞭然であるが、これは単なる英単語の駄洒落による暗記法であり、学問的な裏付けを欠いている。

最近に至るまで、このような胡散臭い研究は後を断たないが、英語圏からの研究もある、ドン・R・スミサナ (1992) によると、日本人の先祖はアメリカ・インディアンであり、インディアン語に由来するアメリカの地名・人名・部族名はすべて日本語で解説できるという。例えば、次のような例が「証拠」としてあげられている。

²もちろん、次のような反論が即座に返ってくることは予想できる。

- (i) a. 文法が違う。
 b. 日本語は膠着語で英語は屈折語である。
 c. いつ、どのように伝わったのかははっきりしない。

これらの問題は将来の研究の進展に委ねたいが、本能的に二つの言語が兄弟であることは直感できるはずである。常識という思考力の枷に毒された三流学者でない限りは。

(5) テキサス	敵刺す	ミズーリ	水入り江	マサチューセッツ	鱒駐節
ミシシッピー	水疾飛	ワイオミング	上の民家	オクラホマ	遅れ本真
オハイオ	おはよう	カンザス	関西	ケンタッキー	関東京
メキシコ	茅始処	カナダ	金田	ナイアガラ	荷揚げ場
アパッチ	あっぱれな者	エスキモー	アシカの肝	ジェロニモ	地浪人者

これではまるで暴走族の名ではないか。訳者あとがきによれば、著者は「最近の日英辞典」と使ったとあるが、ケンタッキーは明治時代になってからできたのであろうか。

他にも、安田 (1955)、藤村 (1989)、李 (1989) などの、万葉集を根拠にして日本語をレプチャ語や朝鮮語と結び付ける邪説、吉田 (1991) のような、日本語をあらゆるものの起源にしてしまう暴説などがあとを断たないが、これらに対しては安本 (1991) による学問的な見地からの反論にゆずるとして、本論文で私が主張することはこれらの先行非研究とは一線を画すものであることを強調しておきたい。その意味では、英語の起源を日本語に置く真に学問的な先行研究は存在しないと断言しても過言ではない。

第3章 語呂あわせとの相違

本稿の初期の版に対して、次のような批判がよせられたことがある。

吉原源三郎とかいう素人のたわごと「英語起源日本語説」なるものは、犬小屋をケンネル (kennel)、辞書を字引く書なり (dictionary) と言うたぐいの与太にすぎない (山崎, 1991a)。

一体彼はどうして私の説を、犬小屋をケンネル (犬寝る) と覚えるような語呂あわせと同じものだと思ってしまったのであろう。試みに私が例示した、日本語から英語になったと思われる単語のいくつかを引出してみれば、すぐさまそれが語呂あわせの英単語記憶法などとは全く違うものであることが理解できるではないか。たとえば、

- (6) a. 坊や (boya) → boy (少年)
 b. 名前 (namae) → name (名前)

これらのどこが字引く書なり、と同じだというのであろう。

boya なる単語が、母音の弱化により boy に変じていくという仮説は、山崎氏がその代表的著作山崎 (1969) の中で展開した学説と全く同じではないか。

だから、氏が私の論理を与太だと決めつけることは、そのまま自分の論理を否定することになるのである。彼には自分が何を言っているのかわかっていないのだろうか。

いずれにしても、山崎氏の私への反論は、私のあげた例証のうち少々言語伝達の構造が複雑なものについて集中していることは明らかである。

そのくせ、氏は私のあげる例のうち、あまりにも単純なもの、ストレートに意味が伝達されているものについては口をふさいで語ろうとしない。すなわち、反論の余地がないのである。次の例を参照されたい。

- (7) 負う (ou) → owe (負う)
 たぐる (taguru) → tag (引き寄せる)
 疾苦 (sikku) → sick (病気)

これらの例は、ケチのつけようがないほど完全に言語伝達されている。そこで山崎氏はこういう沢山の例を無視するわけである。

それならば、次の例についてどうして氏は反論しないのであろう。これはなかなか伝達の構造が複雑なのであるのに。

(8) 場取る (batoru) → battle (戦い)

この例は、日本語が英語のもとになったことを見事に証明してくれるものなのである。

すなわち、欧米では戦いとは、敵の王を殺すことであったのに対し、日本では、敵の領地を奪うこと、つまり場を取る（盗る）ことであったという文化的差異がこの一語にはこめられている。

さらに、山崎氏は、次のような反論をしている。

この吉原源三郎説の最も弱いところは、比較される二つの言葉に意味の共通性がないことが非常に多いことである。たとえば彼は、日本語の（掘る）という動詞を、hole（穴）という英語の名詞と対比してみせる。掘るから穴だというこの漫才のような対比は、学問的立場からは到底認められないものである。cold（冷たい）を（凍るぞ）とやってみせるのも同様のおちゃらけである（山崎, 1991b, 96）。

彼の頭の中にある言語の伝達は、二国間でひとつの言葉が全く同じ意味に伝わる、ということであるらしい。それ以外のものは、たとえどんなに共通性が強くても、無いのと同じ、なのである。

英語の hole が、掘る、という意味ならば認めるが、そうでない以上そんなものはおちゃらけだ、と言い張る彼は、本当に言語学者なのだろうか。言語というものが、いかに誤って伝達され、時と共にその意味すら変化していくということを知らない言語学者がどうして存在しているのか、私には謎である。

たとえば、「前」という、位置、方向を表す言葉が、「お前」となって二人称の人物を表す言葉になり、更に下ってそれが尊称から蔑称に変化した、というような事実は、言語学者山崎にとっては、無いのと同じ、なのであろうか。もしそうだとしたらそんな学者を認めておくわけにはいかない。

私の言うところの（伝日本語人）が、地面に穴をあけてこと作業を「掘る」というのだと教えた時、（源英語人）がその言葉の意味を、そこにあいた穴だと解釈したというのは非常にありうべき事柄である。そこに漫才師の登場する余地はほとんどない。

同様に、「この寒さでは、明日は水が凍るだろう」と言った時、kôru → cold、コールドが冷たいという意味に受け止められたことは誰のおちゃらけでもない。同じような考察によって、私は堂々と次のような類似の例も提出しているのである。

(9) a. 抛る (hôru) → fall (落ちる)

b. 述べる (noberu) → novel (小説)

第4章 おわりに

本来は、どのようにして日本語が海を渡り、英語の起源になったかに関する仮説を本論文に含める予定であったが、この問題に関して本格的に論じるには別の大部の書を必要とするし、その作業は既に私の手によってなされているために、割愛せざるを得なかった（拙著吉原(1992)を参照されたい）。

文献

- 木村鷹太郎 (1981). 『海洋渡来日本史』. 日本シエル出版, 東京. 復刻版, 初版は明治時代.
- ドン・R・スミサナ (1992). 『古代、アメリカは日本だった!』 徳間書店, 東京. 原題: America: Land of Rising Sun, 吉田信啓訳.
- 藤村由加 (1989). 『人麻呂の暗号』. 新潮社, 東京.
- 安田徳太郎 (1955). 『万葉集の謎』. 光文社, 東京. 1993年にたま出版から『古代日本人の謎』として復刻.
- 安本美典 (1991). 『新・朝鮮語で万葉集は解読できない』. JICC 出版局, 東京.
- 山崎恒善 (1969). 『日本語とモンゴル語』. 善修館書店, 大阪.
- 山崎恒善 (1991a). 「最近の言語学の成果」. 『言語の友』, **23**, 12-17.
- 山崎恒善 (1991b). 『文化と文明』. 生善社, 大阪.
- 吉田信啓 (1991). 『超古代、日本語が地球共通語だった!』 徳間書店, 東京.
- 吉原源三郎 (1992). 『伝日本語人論』. 奇狂出版, 大阪.
- 李寧熙 (1989). 『もうひとつの万葉集』. 文藝春秋, 東京.

付録A おまけ

おまけ